

『今月の天候と農作業』

通巻第5634号
12月号
令和元年11月28日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

寒気の影響が弱いため、向こう1か月の気温は高いでしょう。
気圧の谷や低気圧の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<1 週目の予報> 11月30日(土)～ 12月6日(金)

高気圧に覆われて晴れる日もありますが、気圧の谷や湿った空気の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2 週目の予報> 12月7日(土)～ 12月13日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、気圧の谷や低気圧の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 12月14日(土)～ 12月27日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、気圧の谷や低気圧の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

普通作物

◆水稲

1 ほ場の準備

土作りは良質米の安定生産の基本です。

堆肥施用は前作の条件でも異なりますが、牛糞堆肥の場合は1 t程度投入します。ケイ酸質資材は稲の茎葉を硬くし、倒伏やいもち病に強くなる効果があるため、地区基準や土壌診断結果をもとに施用します。

ロータリー耕だけでは作土が浅くなるため、プラウによる深耕を行い、根域を15 cm以上確保しましょう。プラウ耕は作土層を深くする他に、除草の難しいクログワイ、オモダカなどの塊茎（イモ）を厳寒期の低温や乾風にさらし、密度を下げる効果もあります。

また、ジャンボタニシの対策としても厳寒期の耕うんは効果的です。貝の破碎や低温による越冬貝の密度を低下させるため、発生ほ場のロータリー耕は回転数を上げて低速で行います。

2 種子の準備

種子の自家更新は、異品種混入やイネシンガレセンチュウ、馬鹿苗病等の発生の恐れがあるため、採種ほど生産された種子を利用しましょう。複数の品種を扱う際は、異品種混入に注意し、資材の清掃やラベルの確認等を行います。

◆麦類

1 播種・排水対策

平坦地でも播種の適期は、12月上旬頃までです。遅れる場合は、播種量を増やし、莖数を確保します。発芽やその後の生育で湿害を受けないよう、作溝して排水対策に努めましょう。

（荒砂 英人）

施設野菜

◆施設野菜全般

暖房経費の負担が大きくなっています。「小さな対策の積み重ね」が大きな経費の削減につながるため、身近なところから万全の対策を実施しましょう。

◆きゅうり

促成の摘心栽培では子～孫づる、つる下ろし栽培では主枝となる子づるの収穫期です。摘心栽培では採光・通風を良くするため、孫づるまでは規則的に摘心し、ひ孫以降は生長点を2～3本確保しながら、込み合った場所の枝を中心に整理します。つる下ろし栽培でも着果が安定してきたら、午前中は空中湿度を確保するため、内張りビニルの開閉により湿度調節を行います。追肥は、摘心栽培と同様に行います。

◆ピーマン

促成栽培は収穫とあわせ懐枝（ふところえだ）及び側枝を整理します。整枝法は、低位節から発生している徒長枝は根元から除去し、第3～4分枝の懐枝は、収穫が終わったら1節を残し適宜切り戻します。第5分枝以降の側枝については2～3節で摘心を行います。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトともに収穫期です。気温の低下に伴い、晴天時でも谷窓が開かなくなるため、炭酸ガス施用の効果が高くなります。早朝加温や日中加温を行うと、光合成の効率が上がり、生育が促進されるとともに、病害の抑制効果も高まります。

◆いちご

頂花房の収穫と第1腋花房（2番果）の肥大期となります。着果負担も大きく、草勢が低下すると第2次腋花房（3番果）以降の収量、品質に影響するため、かん水不足・肥料切れに注意します。一方で低温期は吸水量、吸肥量ともに低下するため、かん水、追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。

（黒木 正晶）

葉茎菜類及びいも類

大型機械による踏圧や不適切な土壤水分での農作業による練り返しで不透水層ができたほ場には排水性改善のためのサブソイラ耕を行います。乾燥が進んだ状態での施工が効果的なため、ほ場の状態を良く観察してタイミングを逃さず作業を行いましょう。

◆にら

促成栽培の収穫期です。無加温栽培では、過湿による白斑葉枯病の発生や凍害による葉先のヤケが心配されます。白斑葉枯病の予防的な防除を行い、発生源となる残さをハウス外に持ち出すとともに、除湿保温に配慮しましょう。加温栽培では、最低夜温を5℃に設定しますが、刈り取り後3～4日だけは、10℃に設定にすると、萌芽が早く、丈夫な株になります。

◆さといも

収穫が終了したさといもの畑は地温の低下に伴い残さ分解が悪くなるため、すぐに片付けを始めます。残さの分解を進めるためには、トラクタ速度を遅く、ロータリー回転を早くし、できるだけ細かく破碎します。また、残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

◆ごぼう

トンネル栽培は上旬には播種を終えましょう。発芽適温は20～25℃です。30℃以上では発芽率が低下するため、高温時は換気が必要です。特に、トンネルビニールが新品の場合は高温になりやすいため、注意しましょう。

◆にんじん

トンネル栽培は、上旬には播種を終えましょう。地温が不足すると発芽までの日数がかかり、不揃いになるため、25～28℃で管理し、30℃以上になる時は換気をします。発芽後、1月下旬の肥大期までは比較的高温を必要とするため、同じ条件の管理を続けます。

◆かんしょ

育苗ハウスの消毒準備を始めます。前作の種いもが残っていると土壤消毒の効果が薄れます。土壤消毒を行う前に、育苗ハウス内の隅々まで見回って残渣を取り除いた後、取りこぼした残渣の分解を進めるため、耕耘をよくします。消毒した育苗ハウスの作業は、他の作業前やほ場作業の前に行い再汚染を避けましょう。

◆アスパラガス

地上部を刈り取る時期です。刈り取りは茎葉が完全に黄化した後が望ましく、今月下旬が適期になります。今月下旬から来月上旬になると株は休眠から覚めて萌芽できる状態になるため、早出しをする場合は、12月中旬までに刈り取りを終えましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆露地柑橘の病害虫防除

ハダニやカイガラムシ類の越冬虫数を減らすため、マシン油乳剤を散布しましょう。この油乳剤は、虫が呼吸するための気門を塞ぐことで殺虫するため、化学農薬に見られる効果の低下が見られません。枝や葉に十分な量を散布してください。なお、樹勢が弱い樹に対して冬の散布は避け、3月上旬頃の発芽前に散布しましょう。

◆完熟きんかん

果実肥大が十分に確保されている園では、昼間の温度は15℃程度を目安に管理し、着色促進に向けて管理しましょう。肥大不足で、秋季高温管理を行っていた園でも徐々に温度を落としていきましょう。成熟が進んできた園では高温と高湿度により、水腐れ症や裂皮が発生するため、早朝の換気に努め、施設内湿度を低く維持しましょう。

◆マンゴー

秋季夜間冷房を実施した園では徐々に出蕾が見られていますが、芽の動きは昨年と比べ、やや遅めとなっています。出蕾後、急に温度を上げると花芽が少なく、花が咲いても結果が悪いなどの状況が懸念されます。花芽の発生状況を確認しながらじっくりと温度を上げ、充実した花を確保しましょう。

2 落葉果樹

◆基肥の施用

落葉果樹は、柑橘類などの常緑果樹と違い、根の活動が始まるのは2月上旬頃と早い傾向にあります。このため、なし、くり、かきなどは年内に基肥を施用しましょう。

◆ くりの剪定

大玉多収生産のためには、剪定が非常に重要です。隣の樹と枝が当たる場合は、まず間伐や縮伐を実施しましょう。剪定は、弱小枝を全て除去し、太さ8mm以上、長さ50cm以上の結果母枝を1㎡当たり5本程度になるように整理しましょう。

3 果樹園共通

◆石灰の施用

土の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、酸性の場合は石灰質資材で調整しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆電照ギク

「神馬」系統は10℃以下の低温に遭遇すると開花遅延を起こす恐れがあるため、消灯までは夜温を実温13℃（低温開花性系統は12℃）で管理します。なお、消灯前に低温に遭遇した場合は、消灯2週間前から夜温18℃（低温開花性系統は15℃）で予備加温を行ってください。

また、消灯後に変夜温管理を行うことで、大幅に開花が遅れることなく、暖房コストの削減が可能です。

◆スイートピー

気温の低下に伴って品質が安定し、出荷量が増加する時期となるため、つる下げ等の作業を早めに行い、適切な草勢の維持を心がけましょう。

また、年明け以降の灰色かび病発生リスク軽減のために、微生物農薬のダクト散布を継続的に行いましょう。

◆デルフィニウム・エラータム系

1番花収穫前から2番花の抽だいが始まっている株もあるため、出荷計画に合わせた温度管理を行います。

1番花出荷終了後の夜温管理は、ロゼット回避型（1～2月出荷予定）では抽だいまで15℃、ロゼット打破型（3～4月出荷予定）では30～40日間低温処理してロゼットを打破した後、10～15℃で行ってください。

◆トルコギキョウ

気温が下がると施設内の湿度が上がリ、花シミの発生リスクが高まります。

発蕾から開花期に加温することで花シミの発生が減少し、品質並びに日持ち向上にもつながるため、換気除湿等の除湿対策と夜温15℃の加温を行いましょう。

◆ホオズキ

前作で立ち枯れ性病害やセンチュウの発生が見られたほ場では、必ず土壤消毒を行ってください。

なお、冬季は地温が低いため、土壤消毒に長い時間を要することから、早めの実施するとともに、事前にほ場をマルチ等で被覆して地温確保に努めましょう。

◆ラナンキュラス

ハウス内の温度が下がりすぎると生育が停滞するため、日中は15℃程度を目標に温度管理を行いましょう。

また、1番花の収穫開始に伴い草勢が低下するケースがあるため、硝酸態窒素主体の液肥を適宜施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を目指しましょう。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

豚では、11月16日現在で、岐阜県、愛知県を含む9府県において、豚コレラの発生が49例発生しています。また、アフリカ豚コレラは、中国の周辺諸国に感染が拡大しており、国内への侵入リスクが高まっています。

鶏では、鳥インフルエンザの発生リスクが高まる時期になります。防鳥ネットの破れや隙間がないよう点検を行いましょう。

これらの法定伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

本格的に寒さが厳しくなり、朝晩の気温が急激に低下する時期です。特に幼畜は温度変化に弱いため注意が必要です。適切な温度管理と換気を行いましょう。

子牛は、寒さに弱い隙間風が牛体に直接当たらないようコンパネやシート等で隙間風を防止するとともに、赤外線ヒーター等の保温器具を活用し、防寒対策を実施しましょう。ただし、子牛の腹部が濡れた状態のままだと疾病を発症しやすくなるため、敷料をこまめに取り替える等、床は常にきれいで乾燥した状態にしましょう。

この時期は、牛舎内の温度維持のためカーテン等で牛舎を閉め切りますが、換気不足によりアンモ

ニアガス等が溜まると風邪等の蔓延につながるため、新鮮な空気を取り込めるよう換気にも注意しましょう。

◆飼料作物

極早生品種のイタリアンライグラスや晩夏播きのエンバクの年内収穫の時期です。飼料作物の栽培においては、飼養管理に影響のないよう計画的な作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。

(大山 佐喜子)

工芸作物

◆茶

1 茶樹の凍害対策

気温の低下に伴い茶樹の耐凍性は徐々に高まりますが、急激な低温が予想される場合、本年中切りを行った茶園等では冬芽凍害（芽つぶれ）や裂傷型凍害（幹割れ）が発生しやすくなります。

防霜ファンやスプリンクラーを利用して防寒対策を実施する場合は、実際の気温とセンサーの温度との差をチェックした上で、設定温度を0℃とし冬芽の耐凍性獲得状況を確認しながら実施します。

また、幼木園では株元への敷きわら等を実施します。

2 カンザワハダニ・チャトゲコナジラミの防除

一番茶の収量や品質に対する影響が大きいカンザワハダニは、冬期でも産卵する個体が多いため、越冬前後の防除により密度を下げるのが重要です。

防除の際はチャトゲコナジラミとの同時防除に努め、事前に裾刈りを行い、裾部や葉裏への薬剤付着状況を確認しながら、地域の防除暦に従って散布します。

3 新・改植園の準備

茶園の有効土層は60cm程度といわれていますが、茶の根は1m以上伸びることもあり、来年の春に新・改植を予定しているほ場では少なくとも60cm、可能であれば1m以上の深耕や天地返し等を実施し有効土層を確保します。

また、土壌pHの矯正や排水対策等も実施します。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 原木の玉切り

原木伐採後、1～2ヶ月程度の葉枯らし乾燥の終了後、玉切り作業を行います。玉切りの適期は、

- ①若い木では木口面に半径の3分の2程度、老齢木では樹皮近くまでひび割れが入ったとき
 - ②小枝を折り曲げるとササクレ状に折れるとき
 - ③小枝の内樹皮が褐色になるとき
- とされています。

2 植菌

玉切り後は、害菌や害虫の侵入防止のため早めに植菌を行います。

種菌は、栽培条件や目的に合った品種を選定します。

植菌（種駒）数は、原木末口直径（cm）の2倍程度の数とし、植菌間隔は縦に長く、横に短くし、千鳥状に行います。樹皮に傷がある場合や枝の切り口がある場合は、周囲に余分に植菌して、害菌の侵入を防ぎましょう。

（古澤 英生）

◆たばこ

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 葉たばこの大きな減収要因である立枯病・疫病等の、土壌伝染性病害の菌密度の低減と、土壌消毒の効果を向上させるため、冬期耕耘を10日おきに3回以上行いましょう。また、溝堀機等を用いて排水溝を完備し、耕種的防除に努めましょう。

2 土壌消毒を実施する際には、農薬使用基準に沿って薬害・公害の無いように、最大の注意を払って使用しましょう。

特にピクリン剤による土壌消毒は、グレー葉の生出原因となるため、使用時期と使用量に十分注意しましょう。

また、ピクリン剤による全面消毒を実施する場合は植付3ヶ月前までとなります。

肥料の分解を進め、初期生育を促進するために未熟堆肥の使用を避け、施肥畦立は、植付1ヶ月前までに完了しましょう。特に水田は、年内施肥に努めましょう。

また、畦立は練り畦防止のため、土壌水分の良い時期に行いましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

1 2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策	
施設果菜類	病害一般	—	暖房経費低減のため、ハウスを多層・多重被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。	
冬春きゅうり	べと病	やや多	いずれの病害も多発してからは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 うどんこ病は乾燥時に多発するので、ほ場内が過乾燥にならないように管理します。 褐斑病は平年並の発生ですが、べと病やうどんこ病の発病後に激発することがあるので注意します。	
	うどんこ病	並		
	褐斑病	並		
	黄化えそ病 (MYSV) シキイロアザミマ	やや多 並	キュウリ黄化えそ病 (MYSV) の発生が、県内全域で確認されています。発病株を確認した場合は直ちに抜き取り、適切に処分するとともに、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。	
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は少なくとも20日間蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合には、後作きゅうりの定植後に直ちに防除し、感染を防ぎます。	
冬春ピーマン	斑点病	やや少	うどんこ病は、乾燥時に多発するので施設内が過乾燥にならないように注意します。一方、うどんこ病以外の病害は、多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の温湿度管理、排水対策等を徹底します。 いずれの病害も、予防・初期防除を徹底し、罹病した枝葉は感染源となるので、発見したら直ちに除去し、ほ場外に持ち出します。	
	うどんこ病	並		
	黒枯病	並		
	※	シキイロアザミマ	やや少	ミナミキイロアザミウマは多発してからは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底します。 今年のヒラズハナアザミウマの発生量は、既に例年より多い状況です。早めに防除し、密度の抑制に努めます。 両種とも青色粘着板による誘殺に取り組み、生息密度を抑制します。
	ヒラズハナアザミマ	多		
	タバココナジラミ	やや多		
冬春トマト	葉かび病	並	葉かび病・すすかび病は、多湿条件で発生しやすいので過繁茂にならないように管理を行い、ハウスの換気を良くします。病勢が進展してからは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除します。薬剤の感受性低下 (耐性菌の出現) を防ぐため、薬剤のローテーション散布を行います。 トマト黄化葉巻病の発病株は伝染源になるので、必ず株全体を抜き取り土中に埋めるか、ビニル袋に入れて枯れるまで密閉します。	
	すすかび病	やや多		
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	やや多		
	タバココナジラミ	やや多		
冬春いちご	うどんこ病	やや少	うどんこ病は、予防に重点をおくとともに、罹病葉・果実は伝染源となるので速やかに除去します。 炭疽病を発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止します。	
	炭疽病	やや多		
	ハダニ類	並	ハダニ類は寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時の防除を徹底します。なお、薬剤感受性が低下しやすいので同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を心掛けます。また、天敵カブリダニを積極的に利用してください。	
	アブラムシ類	並		
かんきつ類 (露地栽培)	カシハダニ	並	マシン油乳剤は、薬剤感受性の低下した個体群に対しても効果が期待され、またカイガラムシ類との同時防除も可能であるので、樹勢が弱っていないことを確認し防除します。	
茶	カシハダニ	並	冬季のマシン油乳剤の散布は、薬剤感受性の低下した個体群に対しても防除効果が期待できます。	

- 1) ※は注意報を発表していますので、詳しくはHPをご覧ください。
 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。

